

【大風あげ祭り】 国選択無形民俗文化財(平成3年指定)
毎年5月3日、5月5日開催

江戸後期から続く 伝統の大風あげ祭り

西宝珠花^{にしほうしゅばな}の江戸川河川敷で、毎年開催。

春日部の大風あげ祭りは、東近江大風まつり(滋賀)、
相模の大風まつり(神奈川)と並ぶ、日本の三大大風祭りの一つだ。
江戸時代から170年続く伝統行事の魅力と舞台裏に迫る。



江戸川の上空に舞う 100畳敷の大風

春日部の大風は全国でも有数の大きさだ。縦の長さが15メートル、横が11メートル。畳でいうと100畳、ビルに例えれば4〜5階建てに相当する。重さも800キロと半端ではない。

作っているのは春日部市「庄和大風文化保存会」(以下、保存会)だ。保存会は上若組と下若組に分かれ、それぞれが3か月もの時間をかけ、和紙と竹で毎年1張りずつの大風を制作している。地元の子どもたちがあげる約15畳の小風も作る。

大風には、毎年公募で選ばれた文字が書かれ、初節句を迎えた子どもたちの名前を書いた紙が貼られる。大風あげは「子どもたちの健康と幸福な成長を願う」お祭りなのだ。

祭り当日、大風をあげるのは、保存会のメンバーや市民を中心に、市外、県外からの参加者も含め、百数十人である。

江戸川の土手に横たわる大風。引き手はあげ綱を握り締め、河川敷で合図を待つ。合図を送るのは上若組・下若組の組長。大風に寄り添い、風を読み、「その時」を待つ。引き手と5万人の観衆が見守るなか、風が風をはらみ、ゆらりと波打つ。「その時」が来た。「カラン、カラン」、組長がけたたましく鐘を鳴らす。

「走れ!」「走れ!」。江戸川に響き渡る声に、百数十人が一斉に走り出す。大風がふわりと舞い上がり始めた。「もっと走れ!」「全力だ!」。大風はぐんぐんあ



がり、頭上の勇壮な姿に観衆から大きな歓声が湧く。



風は「1畳に一人の引き手」と言われ、100畳であれば最低100人だが、風が強い日はさらに多くの引き手が必要とされる。

風があがる瞬間、全身に伝わる感覚がやみつきに

「風があがるあの瞬間、綱から腕に、腕から全身へと、何ともいえない感覚が伝わってくる。それが忘れられなくて、やみつきになっちゃうんだよ」

と語るのは保存会の加藤宏さん。大風に魅せられ、65年以上携わっている。隣で鎮く保存会の伊藤正二副会長が、

「風あげは、風、いわば自然との勝負だから、毎年その感覚は違う。でも、綱の先頭だろうが、最後だろうが、あがる瞬間、綱を握っていた人だけが平等に味わえるものなんです」と加えた。

子どもの頃に風あげの感覚を知ると、一度離れても、大人になるとまた地元に戻ってきて、あらためて大風に関わる人が少なくないという。



風はあげるものじゃない 手伝うだけなんだ

「我々は風があがろうとするのを手伝うだけ。風の表情を見つめていると、風が風の下に入り込み、風がゆれる。まるで風が自らあがろうとする瞬間がある。そのタイミングを見極めるのが大切なんです」と伊藤副会長。

風があがろうとする「その時」まで、1時間以上待つこともあるし、「その時」が来ないまま、あがらない年もある。だからこそ、風があがった瞬間に立ち会える喜びはひとしおなのだ。

風があがる重要な条件は、主に三つある。

一つ目は、何といつても風だ。

「筑波山がきれいに見えると、たいてい風がよくあがるんですよ」（加藤さん）
現在の会場で、風がよくあがるのは、南東の風が吹いているとき。筑波山がき



れいに見える、この風が吹いていることが多いという。

二つ目が作り方。ちゃんとできていれば、ちゃんとあがる。実は、保管場所のない大風を最終的に仕上げるのは、祭り当日。いわばぶっつけ本番だ。あげてみなければ、風の出来のよしあしもわからない。

三つ目は引き手のチームワーク。当日になって初めて会う人ばかりのチームが、いかにまとまるかが鍵を握る。

「つまり、風を制作する人とあがる人が一体になっていい仕事をしないと、なかなかいい風あげにはならないんですよ」（伊藤副会長）

100人以上の大人が集結し、「風を作ってあげる」というただ一つの目標のために邁進する。一人ひとりがきちんと役割を果たして初めて風があがる。だからこそ、成功の暁には全員でやり遂げた達成感に胸が熱くなり、知らない者同士が涙を流して喜び合う。一致団結する楽しさも、大風あげの大きな魅力の一つなのだ。

養蚕の豊作占いに始まる 宝珠花地区の風あげ

大風あげ祭りの起源は、江戸時代後期・天保12（1841）年と伝えられている。この年、出羽国山本郡（現在の秋田県山本郡）の僧、浄信が、巡礼で宝珠花の小流寺に宿泊し、土地の人々を集めて、「風あげをして養蚕の豊作占いをしてはどうか」と勧めた。

「風があがれば、繭の値段が上がる」というわけだ。以来、宝珠花では、風をあけて繭の豊作を占うようになった。

当時は舟による交通や運送が主流



大風には初節句の子どもたち（男女）の名前が貼られる。5月3日には、立てかけた大風の前で健康祈願のお祓いも行われる。市外や県外からの申し込みも多い（有料）。



小風あげによって子どもたちにも着実に伝統ある「大風あげ」の文化が継承されていく。



で、江戸川は東北や関東一円から江戸への物流の大動脈だった。宝珠花はその交通の要所として、また、地域経済の中心地として大変栄え、賑わいを見せた。

明治期に入ると、それまで繭の収穫前に行っていた風あげを、旧5月の端午の節句に、男子出生のお祝いとして行うようになった。

明治20年〜30年代には、家々で子ども名前や紋章を書いた風を作り、あげていたという。また、商家では風の大小を競い合い、風の糸目近くのあげ糸に鎌やカミソリをつけて、風の切り合いをする「喧嘩風」まで行われた。喧嘩が絶えなくなったことから、明治時代の後半から、上町と下町各一張りずつ、みんな大きな風を作るようになった。

こうして現在までその伝統が続くが、一度だけ^{かみし}上下が一緒になって大風、小風を作ったことがあった。昭和17(1942)年から5年間、大風あげが中止された太平洋戦争後のことだ。





人々の熱い思いが 風あげの伝統を継承する

昭和22(1947)年、宝珠花村では大風あげの復活を誰もが待ちわびた。とはいえ、物資はまだ十分ではなく、和紙も配給制。大風を作る状況ではなかった。しかし村民たちの願いは叶った。当時、埼玉県から「大風あげのためなら」と特別に紙を配給されたという。重要な文化と考えられていた証である。村の人々は貴重な紙を使い、全員で協力して風を作った。「民主」と書かれた大風、「平和」と書かれた小風が大空を舞う姿に、人々は感無量であっただろう。

幾多の危機を乗り越え、時代に合わせて変化しながら、宝珠花の大風あげは170年も受け継がれてきた。その理由の一つについて加藤さんは、

「上若組と下若組は風の作り方もあげ方も違う。お互いに技術を競ってきたから今があるのかもしれない」と語る。

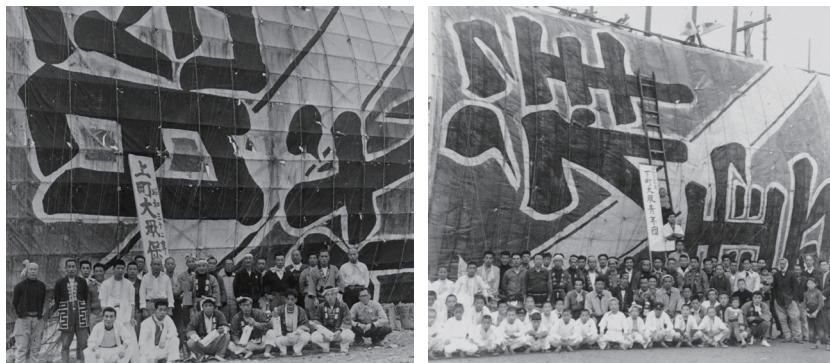
伊藤副会長も、

「普段は仲がいいけど、風あげのときはライバル。相手の風が落ちれば喜んで泣いてね」と笑う。

二つの組の競争心があったからこそ、地域の伝統が継承されてきたのだ。

今年も「春日部の空に舞う大風を感じたい」と保存会の人々が動き出した。上若組も下若組も毎週末に集まって、風作りに取り組んでいる。1500枚の和紙を一枚一枚貼ったり、骨造りをしたり、当日まで仕事は山ほどある。メ

ンバーは20代から60代までの30名ほど。会社員や商店主、とび職や建設業などさまざまな職種の人が集まり、得意分野を生かして作業を進める。すべてが手弁当だ。



昭和32(1957)年、当時の書体は筆文字だったが、現在は千社文字で書かれている。

一日の作業が終わると、みんなで酒を酌み交わす。伊藤副会長が語る。

「お酒の場での会話は、全部風の話。みんな好きだから何時間でも話せちゃう(笑)。こんな歴史があったとか、こういうときはこうすればいい、ってね」

幅広い世代の人が一緒になって作るだけでなく、膝を突き合わせて語り合うこ

とで伝統は継承されていく。最後に、保存会の糸井順一会長に今年の祭りにかける意気込みを聞いた。「子どもたちの誕生を祝い、成長を願う大風だから、ぜひ、大空高くあがってほしい。その勇壮な姿を一人でも多くの方に見ていただきたいですね」



風を読み、鐘を鳴らすのは両組長だ。右から阿部義明さん(上若組組長)、伴英彦さん(下若組組長)。

「大風あげ祭りの引き手」募集

- 開催日程／5月3日(祝)・5日(祝)
- 会場／江戸川河川敷(宝珠花橋下流)大風あげ祭り会場
- 対象／16歳～60歳で体力に自信のある人
※女性は小町風(小風:縦6メートル×横4メートル)の引き手
- 参加費／無料(法被(はっぴ)を貸し出します)
- 定員／各日100人(申し込み順)
- お申し込み方法／4月10日(木)(必着)までに、電話またははがき、ファックスで「引き手申し込み」と明記し、申込者の住所・氏名・性別・年齢・電話番号をご記入の上、下記までご応募ください。
〒344-8577 春日部市役所商工観光課内 大風あげ祭り実行委員会事務局
(TEL 048-736-1111、FAX 048-733-3826)
- お問い合わせ／商工観光課(内線3314)